



菜の花

発行 独立行政法人国立病院機構 指宿医療センター
〒891-0498 鹿児島県指宿市十二町 4145 番地
TEL 0993-22-2231 (代表)
0993-22-2230 (ダイヤルイン)
URL <http://www.hosp.go.jp/~ibusuki/>
印刷 陽文社印刷株式会社

NHO IBUSUKI MEDICAL CENTER

平成 28 年 3 月

認知症院内デイケア導入にあたって

看護部長 猿渡 恵美子

鹿児島県は全国でも高齢化率が高い県です。中でも当院が位置する南薩医療圏は 65 歳以上の人口割合が最も高い地域で 2010 年に 33%を占め、2025 年には 41%と推計されています。

また、厚生労働省は全国で認知症を患う人の数が 2025 年には 700 万人を超え、65 歳以上の高齢者の 5 人に 1 人が認知症に罹患すると発表しました。更に認知症高齢者の数は 2012 年の時点で全国に約 462 万人と推計されており、約 10 年で 1.5 倍にも増える見通しとも言っています。

当院でも、入院患者の高齢化が年々進む中で認知機能に障害を持つ患者も増えつつあります。スタッフステーションに車椅子に座った患者が一人ぼつんという姿を見かけたり、転倒転落や離院などの予防対策も後手後手になっている実状もありました。また、日々、看護をする中で BPSD を発現している患者への優先順位が後になり、他の業務に追われることも重なって根拠のない対応が症状悪化に繋がる恐れも危惧されます。地域の救急搬送患者の約半分の受け入れ、急性期治療に重点をおく当院にとって、認知症看護の充実が医療の質向上に欠かせない分野と考えています。

この状況をなんとかすべきと考え、認知症看護の充実を図るためのリーダー育成を目的に、平成 25 年度より国立病院機構の研修プログラムである認知症看護エキスパート研修に参加し、平成 27 年度院内教育に、認知症看護教育コースを設けました。院内教育の講師は人吉医療センターに認知症看護認定看護師を派遣依頼し、実践を理解できるよう臨床講義を取り入れて教育を行いました。認定看護師が少ない当院にとって、このような人材の交流は研修生以外の看護師の刺激にもなったと思われます。このように病棟での看護を充実させるための人材を育成しつつも、煩雑な病棟環境の中での限界も感じました。

そこで、病室・ベッドを離れ、治療を忘れて穏やかな時間を過ごすことができる場を設けることで、生活のリズムが整い、本来の治療にも良い影響を与えるのではないかと考え、作業療法士と連携しながら、認知症患者の院内デイケアを導入することとしました。実施にあたっては、医師の許可・家族の同意を得て 27 年 11 月より試行を始めました。平成 28 年 2 月 1 日より本格実施しています。

担当者から一言

認知症高齢者が入院して来られると、慣れない環境、知らない人ばかりの環境のなかで、入院生活を過ごすことへの不安は強く、日頃見られない行動を目にします。しかし、認知症院内デイケアに来られる患者さんは、病室ではあまり話をされない患者さんが、昔好きだった貼り絵を行いながら、笑顔で昔話をされる姿などもみられ、穏やかな時間を過ごしています。担当者として、患者さん・家族が入院生活をすこしでも安心して過ごすことが出来るよう充実した時間を提供していきたいと考えています。

デイケア担当看護師 木佐貴真子



理念

患者さまにやさしく、地域に信頼される
良質な医療の提供をめざします。

運営方針

- 1 がん診療の治療の向上をめざします。
- 2 成育医療の充実をめざします。
- 3 救急医療の充実をめざします。
- 4 脳血管障害の治療の向上をめざします。
- 5 地域医療機関との連携を図り、説明と同意に基づいた安全で質の高い医療をめざします。



当院のロゴマークは、指宿市が誇る「菜の花」をモチーフにしています。

たくさんの黄色い円は花の部分を表しており、菜の花は小さな花が集まって1つの花を形成しているというように、病院のスタッフ1人ひとりが集まって、病院という組織があるのだということ表現しています。

緑の弧は菜の花の葉と、病院（花の部分）には新しい風が常に舞い込み、また病院が地域に新しい風を送り出しているという「風」のイメージを示しています。

訪問看護を行って

1 病棟看護師 前田 愛

今回、当病棟に入院し、退院した患者さんの訪問看護を初めて行わせて頂きました。訪問は、入院時の受け持ち看護師と退院調整委員をしている私との2人で伺いました。この患者さんは、疼痛コントロール目的にて入院し、内服にてコントロールができ、家に帰りたいという本人と妻の強い希望で自宅退院した方でした。退院時、浴槽の問題や家の中の段差など入浴や生活動線などに不安な要素を多少残したままでの退院となったため、自宅での様子が気になっていました。しかし、訪れてみると自宅では、妻と2人で生活しやすいように工夫し、病院とは比べものにならないくらい笑顔で生活している姿を見ることができ、訪問した私達もとても安心することができました。只、退院時の不安要素については、解決されていませんでした。段差については、実際見てみると入院時の情報以上に問題があることがわかりました。実際に自宅に訪問したことで、不安の具体的な内容がわかり、今後担当されるケアマネージャーさんへ、より具体的な情報を伝えることができ、「具体的な情報を頂き助かりました」という声も頂きました。訪問看護をすることの意義は、地域の医療関係者と連携し、患者さんを生活者の視点で捉え、ケアが継続できるよう関わる場所にあると思いました。今回、訪問看護をするに当たり、退院調整看護師養成研修や訪問看護eラーニングでの学びを活用しなければなりませんでした。実際にはなかなか活用するまでに至りませんでした。今後も、学びを活用し事例を重ねることで患者さんが安心して生活できるよう、支援者としてのスキルを磨いていかなければと改めて感じました。

